

シンポジウムに参加



しつけは、子どもが健やかに成長していけるように、大人が導き支えること。将来を見据えて社会性を育んでいくための行為なので、暴言や体罰など、子どもが心身の苦痛を感じるような関わりは、それがどんなに教育のつもりでも虐待だ。あざができるほど叩いたり、泣き叫ぶ子どもを放置したりする行為は、決してしつけではない。昔は押し入れに入れられた、叩かれたという声もよく聞く。確かに、当時は「虐待」という概念自体が一般的ではない。しかし、子どもにとってそれがどう影響したかは、大人になった今でもわからないこともある。だからこそ今、しつけと虐待の違いを妊娠中から伝えていくことが大切だと考えている。

しかし、知識や理解があってもそれだけでは防げないケースもある。虐待が起きる



増える児童虐待、その背景にあるもの

殴る、蹴るといった身体的暴力や怒鳴る、罵倒するなどの言葉の暴力、育児を放棄する様々な形がある。虐待は、子どもの心と身体に傷を残し、健やかな成長を妨げるだけでなく、将来の対人関係や社会生活にも深刻な影響を及ぼす。子どもの人権を深く侵害する問題なので、「かわいそう」で済ませていい話ではな

い。社会全体で解決すべき問題だと考えている。厚生労働省によると、2023年には児童相談所への虐待相談件数が22万件を超え、過去最多に。一見、件数が増えているように見えるが、実は「見つけたら通報する」という意識が広がってきた結果でもある。その一方で、しつけと虐待の違いについてはもっと理解されるべきだと思う。



くろす助産院
院長 黒須恵さん

助産師として約2000人以上の赤ちゃんを取り上げ、妊産婦と産後のお母さんに携わる。独自のメソッドで妊娠中や産後、育児の指導、講演活動などを行う。2023年、新たにコーラルケアリスト養成講座を開始。「一般社団法人産後ケアラボ協会」の運営代表。

背景には「孤立」があると思う。特にワンオペ育児のような状況では、ストレスや不安がどんどん蓄積され、発散できずに子どもに向いてしまうこともある。母親が社会から切り離されることで「誰にも頼れない」と感じてしまうそれが虐待の入り口になってしまう。

私たちがができるのは、「暖かい目で見守ること」「困っている時に助けてあげること」。それだけで、救われることもある。身体に痣がある、赤ちゃんがずっと泣いている、毎日同じ服を着ている、季節に合わない服を着ているなど「おかしい」と感じたら、児童相談所(全国共通ダイヤル189)や警察へ連絡して下さい。通報は匿名でもできるし、情報も守られる。子ども自身が連絡してもいいし、お母さん自身が「もしかしたら虐待して

るかもしれない」と不安になったときは遠慮なく相談して下さい。通報される方すべてが子育て経験があるわけではないし、子どもの個性やお母さんの性格、感じ方もそれぞれなのでもちろん誤報もある。それでも確認の結果「問題なし」であれば安心材料になる。意図的に虐待しているお母さんはいない。自分の思うようにならないときに物に当たってしまったら、感情的になつたりというのは誰にでもあること。だからこそ、気づいたら虐待してしまっていたら虐待してしまっている。理想は、寄り添って「大丈夫?」と声をかけてくれる存在がお母さんの近くにいることだ。誰かが見守っていてくれると心が落ち着き、虐待を防げる一歩になる。地域全体で見守る仕組みや専門機関の訪問支援、トレーニングやメンタルヘルスの

「誰にも頼れない」と感じてしまうそれが虐待の入り口になってしまう



シンポジウムで、産後サポートについて講演。

ケアなど、親を責めるのではなく寄り添って、伴走していく支援が必要だ。

子どもも、一人の人間として尊重されるべき存在。自分の子どもだからといって何してもいいわけではない。子どもが親とは違う独立した存在だということを社会全体でしっかりと認識していくことが求められているのではないか。



シンポジウムより赤ちゃんポストの紹介掲示



Kurosu Method®

<https://coralcarelist.jp/>

Tel 090-5398-3177

E-mail megumi.kurosu@gmail.com
megumi@kurosu-josan.com

東京都渋谷区ヶ谷3-31-3

ライオンズヴィアール場ヶ谷402



「家庭養育推進のマーク(里親推進マーク)」

